

「閉じられた関係性の輪に風穴を」

2020年代を生きる私達は、多様なイデオロギーやAIによる”おすすめ”に囲まれて生きる中で、「自分が何を感じ、欲している」のかわかりにくい日々を生きているとも言えます。世界はたくさんの美しいもの、不思議なことに溢れている一方で、生きること自体を喜ぶことは簡単なことではないかもしれません。アートプロジェクト「ハロー地球」は、そのような現代の在り方に問いを投げかけ、他でもないこの地球の上に生きる自分の心と体で感じ、考え、表現する場を共創することを目指し、「ゆらぎ」や「あそび」、「ケア」や「再接続」、「More-than-human（人間以上の）」などのバリューを取り入れたプログラムを企画することから始動しました。（会場のアトリエとなる、30年以上空き家だった古民家の大掃除と共に…）

第1期の実施を終えて感じていることは、このプロジェクトを通して生まれた場が、表現や対話を媒介としたコミュニティ形成の土壌となり、「わたし」という閉じられた世界に、新たな接続の窓を開く機会になったのではということです。普段は出会わない人と会ったり、それぞれの生きてきた時間を垣間見るような対話をしたり。一緒に手を動かして、言葉にはならない部分の思考や感情を共有したり。そのような、一見わかりやすくないコミュニケーションの中で、ふと、それまで気づかなかった自身の内奥にある何かや、喉につかえていたものが見えてくる瞬間、あるいはこれまでと異なる時間軸で自分の生きる時間を捉えるようになる瞬間が、確かにあったことを感じています。

でも、それは目で見えるものでもないし、お腹がいっぱいになるものでもない。誰かにすぐ言葉で伝えられるようなことでも、説明だけで再現できるものでもなかったりします。であるからこそ、ご参加くださった一人一人にとって、かけがえのない時間にもなりうると思いながら、この「わかりづらいこと」を続けています。短期的に結果が出たり、目で見えてすぐわかるようなものに比べると、その効果は理解されにくいことも想像に難くありませんが、アートプロジェクトのような、言わば「余分に見えるもの」の中で生まれる「関係性のゆらぎ」は、日々に豊かさを生むと実感しているからです。

今回のハロー地球で、特に印象深かったのは、世代間交流の中で交わされた、無意識の振る舞いに関する対話。60代の女性の方が、自分がいかに緊張しながら生きてきたか、自ずと人からの評価や目線を内在化してしまっていたということを語ってくださいました。また40代の方からは、父親との関係性にどれだけ縛られていたか、そこに対してこれからどうしていきたいかという話も。毎回、様々なトピックを介して対話や表現をすることで、自分自身にとって本質的に価値のあること、差し迫っていることが垣間見え、深い部分での語らいの場が生まれていきました。

そんなことを振り返りながら、改めて思うのは、個々人が自身とのつながりを捉え直すような場に出会える事が、参加者にとっても、主催者自身にとっても、また地域の生態系にとっても、不可欠であるということです。「自分にとって本当に大切なものって何だったっけ？」と、そんなことを考えられるような機会があること、そのような本質的な問いを通して、誰かと出会えたり、自分自身と出会い直すこと。そんな場を、これからもつくっていければと思っています。

アーティスト・プロジェクトディレクター | 山際 真奈（やまぎわ・まな）

上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科卒業（視覚文化論・修士）。カリフォルニアで学生時代を過ごし、領域横断的なアートプラクティスを学ぶ。福武財団を経て、国立新美術館・東京国立近代美術館のミュージアムエデュケーターとして探求・対話・表現のアートプロジェクトや教育プログラムを企画。2023年、長野県に移住し、世界との接点に風穴を開けるアートプロジェクト、「ハロー地球：未来をつくる、リベラルアーツ部」や「スザカ写真部」を立ち上げ、主催している。豊かな自然環境を生かした教育プログラム「森ラボ」の企画運営や、46億年の地球史を歩く「ディーptimeウォーク」と舞踊を掛け合わせたプロジェクトも展開。アーティストとしては、音楽や映像を中心とした制作活動に取り組みながら、古民家や高原など様々な場所での発表を続けている。須坂市在住。

「共に過ごし、出会い直す、そのプロセス」

「ハロー地球」という、実験的なアートプロジェクト。この企画は、山際真奈さんとの出会いと、そこから生まれた対話から始まりました。私たちは歳が離れているため、体験したことや過ごしてきた時間が異なり、お互いのことを時代や社会の背景を踏まえながら客観的に捉えられる、ちょうど良い距離感が。会話には、希望や温もり、疑問や怒り、不甲斐なさ、いろんなことが織り混じり、その一つ一つに対して、なぜそう思うのか？なぜそうなったのか？という疑問を投げかけ、語らいながら、プログラムが少しずつ出来上がっていききました。

毎回来てくれた方もいれば、数回のみ来ていただいた方もいる中で、ある参加者の方が、「来る前に、行こうかどうしようか迷う」と。自分達で企画しながらも、私にもそういうところがちょっとだけありました。なんとなく人に会うことの怖さ。開示することの不安。でもその部分を開くことで、何かが軽くなることもわかっていました。私だけが感じていると思っていたことを、誰かも感じていること。そのこと自体を分かち合うことの、なんとなくホッとする感じ。凝り固まっている感情にも気づきながら、もしかしたら、こういう時間こそが、生きることを支えてくれるものであり、大事なことなのではないかと、少しずつ確信するようになりました。

価値を生み出す時間でも、消費する時間でもない、だからこそラベリングのできない、生産性や経済だけを考えるならなくてもいい時間だったのかもしれませんが。ラベリングができないことは不安になるし、果たして成果は出ているのかと気になってしまう一ではなげ生産性にとらわれてしまうのか、なぜ生きているだけで幸せだと思えなくなってしまうのかという問いを、それぞれの経験と照らし合わせ問いかけながら、話して、そして作って。何者かになるための場所ではなく、「わたし」のままで、「わたし」を解いていく時間となりました。

日常にある、家族や友人との時間、会話。本当は、どの時間にも、深いところで分かり合えるチャンスがあるのに、表面的な会話で終わってしまったたり、あるいはその時間さえ持てないことがあります。今まで「わたし」がこの地で過ごしてきた時間と場所、家族、学校や職場、立場などで固定されていたことを流動的にする場が、「ハロー地球」にはありました。いつからであっても、この地球で日々流れる今という時間に向き合い、心地よい時間を自ら作り出しながら、周りの人とその時間を共有できるということ。そのために何ができるのか考え、行動しつづけたと考えています。

アーティスト | 北澤麻希（きたざわ・まき）

幼少期に母が営んでいた手芸店で、平面的布が立体になり、いろいろなものが作れることに感動し、作ることが大好きになる。高校卒業後、ロンドンの美術大学に進学し、卒業後はイッセイミヤケにてテキスタイルやアクセサリーの企画を担当。出産をきっかけに、衣食住を自分の手でできることは作っていききたいと思い、土が身近にある場所に移住。感情から豊かなコミュニケーションを生むことをテーマに、専門学校の非常勤講師として教えたり、子供たちに向けたものづくりと表現のワークショップを行っている。白馬村在住。

ハロー地球

Art Project: Hello, the Earth! 2024 Report

2024 Report

未来をつくる

リベラルアーツ

The Art Project Report!

第1回

「ハロー地球 未来をつくる、リベラルアーツ部」は信州須坂で始動したアートプロジェクト。古民家のアトリエで、10代～60代の“部員”が様々な表現と対話を通して日々の生活とそこから見えてくる世界を見つめ直し生きていきたい未来を想像する場を半年間にわたって作りあげました

第1回 2024年6月9日(日) わたしはどこにいる？ 言の葉の傘

初の顔合わせは、「詩」を通した自己紹介ならぬ自己交換会。自分の言葉と誰かの言葉をつないで「連歌」のように詩をつくり、ビニール傘にペイント。「わたし」を作り上げてきた記憶や物語を手掛かりに、言葉で自らを守る「言の葉の傘」をつくりました。締めくくりは、プロジェクト期間中、半年寝かせる梅ジュースづくり。子ども大人も一緒に、いよいよ旅のはじまりです。

ゲスト：詩人・あさのかすみ



第3回 2024年8月25日(日) 価値ってなに？ いきなり哲学対話

「経済」と「価値」をテーマに、白熱哲学対話。まずは一人一人が価値に関する問いを提案し、この日は「価値のない世界はありえるのか？」という問いについて対話することに。答えのない問いについて言葉を紡ぎながら、日々の振る舞いに“常に既に”現れる価値とは一体何なのか、対話を続けました。最後は言葉にならない想いを石粉粘土で練り上げ、問いを抱えたまま閃々と帰途に…。

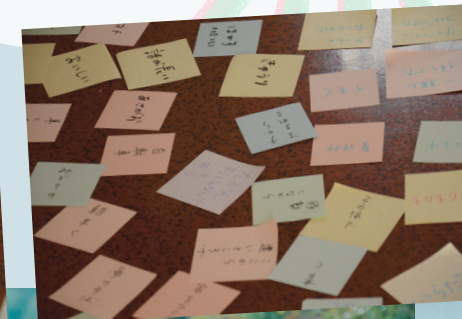
ゲスト：哲学者・石山秀明



第7回 2024年12月15日(日) 身体はどこまで？ 身体と思考のくせ

フィジカルシアターのワークを体験しながら、身体の「くせ」にアプローチ。様々な感情を身体だけで表したり、最後はオデュッセイアにも挑戦。身体を開いた後は、多様な近現代アート作品の対話鑑賞で思考の「くせ」も垣間見ながら、身体も頭もへとへとになるスパルタな回になりました。(休憩時間に、お一人が持ってきた「パースデーサングラス」を一人一人かけてキメるという謎ゲームが始まる「ハイ」ぶり。)自分自身の中に溜め込まれた「くせ」に気づくことで、意識していなかったものが浮かび上がる、静かな変革の時間に。

ゲスト：アーティスト・赤須秀人



“部員”のこえ

- 子どもと一緒に創造的なWSに参加するのは初めてだった。子どもを抜きにしても楽しめたと思うが、今この未就学タイミグでこのプログラムに参加できたことを有意義だと思っている。自分の社会への向き合い方が、ゆるく定まらないままでも、アウトプットを増やそうと思えた。参加者全体の付き合い、自分からはでない発想・企画、距離感、許容されている感、ちょうどいい関係も印象に残っている。(40代女性)
- 性別、年代、バックボーンの違う参加者の方々とのコミュニケーションはとても良い機会でした。大袈裟に言うとう小さな異文化交流会であったとも思います。参加する前の自分とはきっと別の自分になっているのだらうな、と。(30代男性)
- 上の世代の方と話すことに若干抵抗感があったけれど、参加してからは積極的に上の世代の方とも話したい、と思うようになりました。(10代女性)

第2回 2024年7月21日(日) 理想と不安は紙一重？ 個人史から地球史へ

生活や歴史の中にある「理想」。行動の糧となると同時に、「不安」を生み出すことも。そんな「理想」の両義性を考えながら、今回のプロジェクト用に制作した世界各地の理想と不安にまつわるインタビュー映像を視聴。「わたし」と「わたしではない誰か」、さらに地球が生きてきた時間にまで想いを馳せながら、100年の「自分史」と46億年の「地球史」が対になったテキスタイル作品をつくりました。

第6回 2024年11月10日(日) コミュニティってなに？ 閉じながら開く模型

生まれ育った場所の記憶は、誰にとっても特別なもの。匂いや色、音や味が手ぐさかりに記憶の中の場所を掘り下げ、そこに付随する様々な「集団」についても振り返りながら、コミュニティが持つ包摂と排他的の矛盾について考えました。最後は、わたしたちの身体の基本単位である、細胞の膜が「閉じていながら開いている」ように、いつでも入ったり出たりできるような構造の場所やコミュニティの在り方は可能なのか、木片の模型を使いながら想像。童心に帰って積み積みしながら、とんがった建物が次々に…。



第5回 2024年10月13日(日) 地球の現在地はどこ？ Deep Time Walk@峰の原高原

イギリスで開発された、4.6億年の地球史に出逢いながら4.6kmの道のりを歩くプログラム・Deep Time Walkを、舞踊とのコラボレーションによって再編成。高原を連れ立って歩く道中、「月の誕生」、「生命の誕生」、「カンブリア大爆発」の地点では、鮮やかなダンスパフォーマンスが行われました。様々な変遷の中で、今の姿まで辿り着いた地球の不思議を身体いっぱいに感じながら、現在へと帰還。これまでに地球上で起きたたくさん「偶然」が重なって、私たちをつくる「必然」になっている奇跡を垣間見る時間となりました。

ゲスト：舞踊家・鈴木彩華



開催概要

開催期間：2024年6月～2025年1月(月1回・13:00-16:00)
開催場所：Atelier Crater Circus (長野県須坂市臥龍2-18-3)
参加人数：15名 (10代以上、小学生は保護者同伴)
参加料金：1000円 (高校生以下無料、ドリンク付)
主催：〇〇Emergence Lab〇
協力：須坂市地域おこし協議会

